

教務だより

2014年10月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

ナンノタメノ受験？

茗溪塾塾長 宇野 雅春

「自分にはやりたいことがある。将来の夢がある。目標がある。でも、目標を達成したからといって、次には何があるのだ？目標を達成してどうするというのだ？『もしかしたら、今、私のやっていることは無意味なのかもしれない』そう考えたら、こうして机の前でわけのわからない数学の問題とにらめっこしている自分が嫌になってしまった」

これはある「合格体験記」の一節です。入試が近づいてきてあせりが出はじめると勉強も空回りしてきます。そんなときにふとわき起こる疑問。思春期の感受性は容赦なく、さまざまな疑問を投げかけてくるようです。

「何のために、何をしているんだろう。私は何だろう、ワタシハダレダ、ワタシハナンダ、ナニガアルノダ、ナニヲシテイルノダ！ ナンノタメニ？ ナンダ？ ナンダ？ ナニ？」という具合にです。

「わからない、ワカラナイ、答えが見つからない」

そんな悩みのなかでも「受験」は現実となってきます。

この合格体験記の続きが心に残っているのは、その出ようもないはずの「答え」について生徒自身が受験を通してそれなりの結論を導いているところにあります。

「受験に次なんてない。一度失敗したらそれでEND。一点や二点の差で勝ち負けが決まってしまう。なんだかそう考えると哀しくなってくる。虚しくなってくる。自分は今まで何をやってたんだろう。そう思ってしまう。だったら、はじめからがんばったりしなきゃよかった、なんて思ってしまう」

でも「違う」……。

「それは違う。どうせ負けてしまうからといってはじめから何もしようとしないのと、やれるだけやって挑んでいくことには大きな差がある。受験だけじゃない。すべてにおいてそう言える。そうだ、一生懸命やって無駄になるようなことなんてない。すべてのことには意味があるのだ」

この結論にいたるまで、長い長い葛藤があったのだと思います。そして何らかの答えが出たのはそれなりに「受験」を正面に見すえてしっかりと取り組み、やりきったからだろうと思います。

いよいよ受験本番です。何事もすぐには「答え」が出てきません。でも、がんばった先にはかならずそれなりの「答え」が待っているはずですよ。

(塾長著書「合格の道しるべ」より)